

# 高校生の衣生活管理能力形成への性差による課題

多々納 道子\*・平井 早苗\*\*・鎌野 育代\*\*

Michiko TATANO\*, Sanae HIRAI\*\*, and Ikuyo KAMANO\*\*

Problems due to Gender Difference for High School Student's Formation of Clothing Management Ability

## 要 旨

生涯に渡って自立した衣生活者であり続けるには、被服を最も効果的に着用することを計画的に遂行し、評価できる衣生活管理能力を高校生段階までに身につけることが重要である。本研究は、家庭科においてこのような衣生活管理能力を形成するための課題を明らかにすることを目的として、高校生を対象に調査研究を行った。

その結果、性差はあるものの男女とも衣生活の関心と学習意欲は高く、衣生活管理能力形成のための学習を進めるにおいては、困難な状況ではないと言える。衣生活観と衣生活行動に関する項目の中で、着方や被服の購入については、男女とも自分なりの考えを持ち、行動しようとする傾向があった。このようなことを反映してか、休日用の被服を着用する際には、男子は生活活動への適合をより重視し、女子は生活活動への適合と自己表現を同じように考慮しており、男女間で用途に応じて着用する被服の考慮点は若干異なることが明らかとなった。家庭での被服製作については、布を使用した小物類を製作する程度にとどまり、しかも少数であった。ボタンつけやまつり縫いの被服を補修するために習得した技術には男女差があるが、出来ても自分ではなく家族など自分以外にしてもらおうという依存の傾向が強かった。その中で、男子ではボタンつけが出来る者は出来ない者に比べて、自分でつける者が多く、出来ることが生活の中で活用することにつながることを明確に示すものであった。

衣生活についての家庭教育は、男女とも約40%の者がなされていないという状況で、家庭科での学習が重要になるものと考えられる。そして、男女間において考え方や被服行動に差異がみられたので、その違いを踏まえ、また衣生活の関心の高さを活かして、意欲的に取り組める内容を工夫して指導することが、衣生活管理能力の形成について課題であると考えられる。

【キーワード：衣生活管理能力、衣生活の関心、被服着用時の考慮点、衣生活に関する家庭教育、衣生活の学習意欲】

## I はじめに

清潔で快適な被服の着用によって、個人の特性を生かし生涯に渡って豊かで充実した衣生活を営むことは、人間として基本的な欲求を満たすことである。そのためには、まず一人ひとりが被服に関する基礎的・基本的な知識や技術を確実に身につけ、それらを実際の生活に活かすことが必要である。このような衣生活を実現させるために、被服を最も効果的に着用することを計画的に遂行し、評価できる能力を衣生活管理能力と規定し<sup>1)</sup>、高等学校卒業までに身につけることが重要だと考えるものである。

従来から、家庭科教育では被服の役割や人体との関わりを考え、選択、購入、着用、管理、保管や処分など、適切に衣生活行動ができるように、小学校から高等学校段階まで系統的に学習してきた<sup>2) 3) 4)</sup>。ただ、実際の衣生活では、既製服やクリーニングなどの利用によって社会化・外部化が著しく進行しており、加えて被服による装飾の機能は女性の関心が強いとか、関連する仕事内容は女性の役

割であるというように、固定的なとらえ方が依然として強い領域である。このことは、男女に等しく衣生活管理能力を形成する際の阻害要因になっている<sup>5)</sup>。これらの影響か、中学生と高校生では家庭科を構成する内容の中で、衣生活については興味度があまり高くなく、学習内容や学習方法を工夫し、学習意欲を持って取り組むような授業にすることが課題であると指摘されている<sup>6)</sup>。

そこで、本研究では高校生が衣生活管理能力を身につけて自立した衣生活を営むことができるように、衣生活の関心やどのような衣生活観や衣生活行動を取っているのか、また家族からの指導の実態などを調査することによって、家庭科における衣生活管理能力を形成するための課題を明らかにすることを目的とした。

## II 研究方法

### 1. 調査対象と調査時期

島根県内の公立高等学校2校の専門学科に在籍する生徒を調査対象にした。回収率は100.0%で、男子76人と女

\* 島根大学名誉教授

\*\* 島根大学教育学部初等教育開発（人間生活環境教育）講座

子98人の計174人であった。その内、1校は1年生から家庭科を学習するのに対して、もう1校では2年生から学習するものである。内訳は、1年生97人と2年生77人であった。いずれも家庭科の家庭総合を学習している。調査は平成29年7月に実施した。

## 2. 調査方法と調査内容

質問紙法によるアンケート調査により、高校生の衣生活の関心、被服を着用する際の考慮点、衣生活観や衣生活行動、衣生活についての家庭教育や衣生活の学習意欲などを明らかにした。

## Ⅲ 結果及び考察

### 1. 衣生活の関心

衣生活管理は被服を着用することを中心にして、被服の選択、購入、着用、管理、保管や処分などを含む衣生活行動からなっている。被服を着用することは、被服と一体となって自己表現を行うことである。すなわち、被服は自分を表現するツールであり、思春期にある高校生にとって、心理的にも重要な意味を持っている。そこで、まず高校生にとって衣生活の関心がどの程度なのかについて、「大変関心がある」、「やや関心がある」、「あまり関心がない」と「全く関心がない」という者までの4件法によって明らかにした。その結果は、表1に示される通りである。

男女とも最も多くの割合を占めたのは、衣生活に関心が「ややある」という者で、男子は43.4%、女子は58.2%であった。これに関心が「大変ある」というものを合わせると、男子は57.9%、女子は82.6%にも達した。このように程度の差はあれ、男女とも衣生活に関心があるという者が半数以上を占めた。そのため、「あまり関心がない」は男子34.2%、女子は14.3%と男女差はあるものの、そうした大きな割合を占めるものではなかった。衣生活の関心について、男女間に差異があるかどうかをみるため、無答を除いて $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で有意差があり( $\chi^2(3)=16.3, p<.01$ )、男女差のあることが認められた。

調査対象の高校生の課題は、男女によって衣生活の関

心異なるので、学習内容や方法の工夫によって、男女がともに意欲的に取り組むようにすることである。

### 2. 被服を着用する際の考慮点

高校生にとって被服は自己を表現するツールであり、またその時々環境下で衣生活を快適に営むために、気候や着用者自身の体調など種々の条件を考慮して、着用する被服を決定する必要がある。日々被服を着用する際にどの様な点を考慮して選んでいるのかを明らかにすることは、高校生の被服の思いや考え方を明らかにすることになり、家庭科における被服の役割や着方を指導する際の基礎資料となる。今回の調査対象校はいずれも制服を着用しているため、被服を着用する際の考慮点を通学用と休日用に分けて調査することにした。そして、被服を着用する際に一般的に考えられる「天気・気温」や「主な活動内容」などの8項目を考慮点として選び、尋ねたものである。

#### (1) 通学用

まず、通学用について表2をみると、被服を着用する際の考慮点として「制服」をあげるものは男子が84.2%、女子は96.9%と集中して、最も多かった。「制服」の着用が校則に定められているので、当然校則にしたがって、「制服」を着用することを理由にするものであった。次いで多かったのは、「天気・気温」であり、男子は22.4%、女子は34.7%であった。制服であってもその日の天気や気温を考慮して、制服の上や下に重ね着が可能であるので、それぞれ着方を工夫しているものと思われる。その他、男子は「主な活動内容」が11.8%、女子では8.2%であった。さらに男子は「着心地」を7.9%、「体調」3.9%、女子では「体調」が6.1%の者に考慮点としてあげられていたが、いずれも重視しているとみなされるような割合ではなかった。男女間に違いがあるか否かを求めるため、回答のなかった「流行」と「無答」を除いて $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差は認められなかった( $\chi^2(6)=9.3, ns$ )。

制服が規定されている場合には、通学用の被服は制服というのがドレスコードすなわち、被服の規定であり、高校生はそれに従わざるを得ない実態だと言える。

表1 衣生活の関心

	人 (%)		
	男子	女子	計
大変関心がある	11 (14.5)	24 (24.4)	35 (20.1)
やや関心がある	33 (43.4)	57 (58.2)	90 (51.8)
あまり関心がない	26 (34.2)	14 (14.3)	40 (51.8)
全く関心がない	6 (7.9)	1 (1.0)	7 (4.0)
無答	0 (0.0)	2 (2.0)	2 (1.1)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

表2 通学用

	人 (%)		
	男子	女子	計
天気・気温	17 (22.4)	34 (34.7)	51 (29.3)
主な活動内容	9 (11.8)	8 (8.2)	17 (9.8)
体調	3 (3.9)	6 (6.1)	9 (5.2)
着心地	6 (7.9)	2 (2.0)	8 (4.6)
デザイン	2 (2.6)	0 (0.0)	2 (1.1)
流行	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
おしゃれ	1 (1.3)	2 (2.0)	3 (1.7)
制服	64 (84.2)	95 (96.9)	159 (91.4)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

(複数回答)

(2) 休日用

次に休日用では、通学用と異なって本人の自由な意思によって選択できる余地が大きいので、高校生が着用する被服をどの様な観点から選ぶのかを明らかにすることが可能である。では、休日用についてはどの様な点を考慮しているのかを表3より見てみよう。

男女とも最も多かったのは「天気・気温」であり、男子は57.9%、女子では54.1%を占めた。暑さ・寒さを防ぎ、体温調整を補助するという被服の機能を、男女とも最も重視していることが理解できた。これに次いで、男子は「主な活動内容」と「デザイン」がともに36.8%で、生活活動への適合と自己表現を同じように重視するものであった。さらに、「着心地」、「流行」と「おしゃれ」が30.3%と同じ割合を占め、これらの考慮点においても生活活動への適合と自己表現との両方に重きを置くものであった。

女子では「天気・気温」に次いで、「おしゃれ」が48.0%、「デザイン」が38.8%であり、自己表現が重視されていた。さらに、「主な活動内容」が31.6%、「着心地」と「流行」がともに23.5%という状況であった。その他考慮する点はいずれも10%以下であり、重視するものは極めて少なかった。このように被服を着用する際の考慮点を個々に見ていくと、休日用においても通学用と同様に $\chi^2$ 検定によって男女差はなかった( $\chi^2(8) = 7.0, n.s.$ )。

次に、被服を着用する際の考慮点を個々にではなく、全体的にみてみよう。

考慮点を大きく生活活動への適合と自己表現の二つに分けて、それぞれ考慮する割合の違いを比較することにした。すなわち、生活活動への適合を示す「天気・気温」、「主な活動内容」、「体調」と「着心地」、自己表現をあらわす「デザイン」、「流行」と「おしゃれ」を考慮点とする割合を求めた。男子では生活活動への適合を考慮する者の合計は、複数回答であるため132.9%、女子は114.3%、自己表現を考慮する者の合計は男子が97.3%、女子は110.3%であった。男子は生活活動を考慮する者の方が自己表現を考慮する者よりも約1.4倍であるのに対して、女子の場合、両者はほとんど同じであった。

このように、被服を着用する際の考慮点をさらに分析

表3 休日用 人 (%)

	男子	女子	計
天気・気温	44 ( 57.9)	53 ( 54.1)	97 ( 55.7)
主な活動内容	28 ( 36.8)	31 ( 31.6)	59 ( 33.9)
体調	6 ( 7.9)	5 ( 5.1)	11 ( 6.3)
着心地	23 ( 30.3)	23 ( 23.5)	46 ( 26.4)
デザイン	28 ( 36.8)	38 ( 38.8)	66 ( 37.9)
流行	23 ( 30.3)	23 ( 23.5)	46 ( 26.4)
おしゃれ	23 ( 30.3)	47 ( 48.0)	70 ( 40.2)
制服	1 ( 1.3)	0 ( 0.0)	1 ( 0.6)
その他	7 ( 9.2)	7 ( 7.1)	14 ( 8.0)

(複数回答)

すると、通学用では男女差はほとんどみられなかったが、休日用の場合には、男子は生活活動への適合をより重視し、女子においては生活活動への適合と自己表現を同じように考慮しており、男女間で用途に応じて着用する被服の考慮点が異なることが明らかとなった。したがって、このような差異を考慮して、着方の指導を検討する必要がある。

3. 被服の補修の実施者及び補修のための技術の習得の程度

(1) ボタンつけ

被服のボタンがとれる、ほころびる、破れるなどが生じた時には、補修が必要となる。それは、補修して着用することによって、身だしなみを整えたり、被服を長持ちさせたりするからである。したがって、小学校や中学校の家庭科では、ボタンつけやほろび直しのためにまつり縫い出来るように学習している。では、高校生がこれらの知識や技術を実際の生活の中で活用しているかどうかについては、「自分でつける」、「家族など自分以外にしてもらう」、「そのままにしておく」という設問によって、またその前提となるボタンつけとまつり縫い出来るかどうかは、「大変じゃうずに出来る」～「全然出来ない」までの4件法によって尋ねた。

① ボタンが取れた時の対応の仕方

まず、ボタンがとれた時の対応の仕方について求めた。

表4のようにボタンが取れた時の対応の仕方は、男子は「家族など自分以外にしてもらう」が72.4%と大部分を占めた。そのため、「自分でつける」のは、19.7%であった。「そのままにしておく」というのも7.9%あった。これに対して、女子では「自分でつける」が54.1%と最も多いものの、「家族など自分以外にしてもらう」という者が45.9%と半数近くを占めた。「そのままにしておく」というのは、皆無であった。男女間に差異があるかどうかについて $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で有意差があり( $\chi^2(2) = 25.9, p < .01$ ) ボタンが取れた時の対応の仕方には、明らかに男女差があった。

このようにボタンが取れた時の対応については、自分ですするというよりも他人任せの傾向が強く、また男女間に著しい差異があった。したがって、衣生活管理能力の形成という点から見ると、例えば小学校段階で準備した裁縫箱は、必要になった時は直ぐに、しかも一生涯使用するようというのを指導内容に入れるなど、性差を生じさせないような指導の工夫が必要となる。

表4 ボタンが取れた時の対応の仕方 人 (%)

	男子	女子	計
自分でつける	15 ( 19.7)	53 ( 54.1)	68 ( 39.1)
家族など自分以外に してもらう	55 ( 72.4)	45 ( 45.9)	100 ( 57.5)
そのままにしておく	6 ( 7.9)	0 ( 0.0)	6 ( 3.4)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

## ② ボタンつけの習得

ボタンつけの習得については表5に示したように、男子では「あまりじょうずに出来ない」というのが42.1%と最も多く、「全然できない」が11.8%であった。両者を合わせると、程度の差はあれ53.9%と半数以上の者が出来ないという状態であった。そのため、「まあまあじょうずに出来る」が39.5%で、「大変じょうずに出来る」は6.6%とわずかであった。ボタンつけは小学校家庭科での学習内容であるにも関わらず、高校生の現在において出来る者より出来ない者の方が多いということは、表4に示したように、ボタンがとれた時に、自分でつける者が20%未満で、逆に他人任せやそのままにしておく者が大部分を占め、実践が伴っていないことによるものと考えられる。

これに対して、女子では「まあまあじょうずに出来る」という者が65.2%と約2/3を占めた。これに「大変じょうずに出来る」という者を合わせると、77.5%になった。これに対して「あまりじょうずに出来ない」は20.4%であっても、「全然できない」者はわずか3.1%であった。

このように女子では、ボタンつけが出来ると自己評価する者が多く、それゆえボタンが取れた時には、自分でつけるという者の割合が多くなったものと考えられる。男女間では $\chi^2$ 検定により1%水準で有意差が認められた( $\chi^2(3) = 17.8, p < .01$ )。

したがって、衣生活管理能力の形成には、小学校や中学校の家庭科で学習するような基礎的・基本的な知識や技術を確実に身につけ、さらに実生活にいかにして活かしていくかが、課題としての第一歩となる。

表5 ボタンつけの習得

人 (%)

	男子	女子	計
大変じょうずに出来る	5 ( 6.6)	11 ( 11.2)	16 ( 9.2)
まあまあじょうずに出来る	30 ( 39.5)	64 ( 65.3)	94 ( 54.0)
あまりじょうずに出来ない	32 ( 42.1)	20 ( 20.4)	52 ( 29.9)
全然出来ない	9 ( 11.8)	3 ( 3.1)	12 ( 6.9)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

## (2) まつり縫い

## ① 被服のほころびやほつれた時の対応の仕方

もし、着用していた被服がほころびたり、ほつれたりした時には誰が補修するのかについて回答を求めた。その結果は、表6の通りであった。

「家族など自分以外にしてもらう」という者が男子は73.7%、女子は63.3%で最も多かった。そのためか「自分で直す」という者は男子11.8%、女子22.4%に過ぎなかった。さらに「そのままにしておく」という者が、男女とも約14%であった。男女差を見るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、差異は認められなかった( $\chi^2(2) = 3.4, n.s.$ )。

男女とも被服を補修するという衣生活管理能力を発揮して、生活者としての自立という望ましい被服行動をとる者は少なかった。

表6 被服のほころびやほつれた時の対応の仕方

人 (%)

	男子	女子	計
自分で直す	9 ( 11.8)	22 ( 22.4)	31 ( 17.8)
家族など自分以外にしてもらう	56 ( 73.7)	62 ( 63.3)	118 ( 67.8)
そのままにしておく	11 ( 14.5)	14 ( 14.3)	25 ( 14.4)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

## ② まつり縫いの習得

次に被服のほころびやほつれた時の補修に利用されるまつり縫いが、どの程度出来るかについて尋ねた。結果は表7に示した。

男子は「全然出来ない」という者が38.3%と最も多かった。次いで、「あまりじょうずに出来ない」が36.8%であり、程度の差はあれ出来ないという者が75.1%と約3/4を占めた。そのため、「まあまあじょうずに出来る」者は21.2%に過ぎず、「大変じょうずに出来る」という者もわずか2.6%であった。

女子では「まあまあじょうずに出来る」という者が41.9%で最も多かった。これに「大変じょうずに出来る」という9.2%の者を合わせると51.1%となり、過半数の者はまつり縫いが出来ることになる。この割合は男子の2倍以上であった。また、「あまりじょうずに出来ない」のは31.6%、「全然出来ない」は17.3%であった。このように、まつり縫いが出来る者と出来ない者の割合は、男女間で逆であった。 $\chi^2$ 検定によってその違いをみると、5%水準で有意差が認められた( $\chi^2(3) = 15.9, p < .05$ )。すなわち、まつり縫いに関しては、女子の方が出来るという者が多いことが理解できた。

男子には出来ない者が多く、まつり縫いが出来る者と出来ない者が半々という実態が、表6のように被服のほころびやほつれた時に誰が補修するのかという対応の仕方に違いになってあらわれたものと考えられる。

家庭科学習の定着度を求めた研究によると、衣生活領域のボタンつけやほころび直しの技術の定着度は、男女差が大きくしかも学校種が上がるにつれて定着度が低下していくことが明らかにされており<sup>7)</sup>、本研究結果にも同様の傾向が認められた。したがって、ボタンつけと同様であるが、衣生活を管理するための基礎的な知識や技術を確実に習得し、実生活に活かせるような指導の工夫が必要となる。

表7 まつり縫いの習得

人 (%)

	男子	女子	計
大変じょうずに出来る	2 ( 2.6)	9 ( 9.2)	11 ( 6.3)
まあまあじょうずに出来る	16 ( 21.0)	41 ( 41.9)	57 ( 32.8)
あまりじょうずに出来ない	28 ( 36.8)	31 ( 31.6)	59 ( 33.9)
全然出来ない	29 ( 38.3)	17 ( 17.3)	46 ( 26.4)
無答	1 ( 1.3)	0 ( 0.0)	1 ( 0.6)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

③ ボタンつけとまつり縫いが出来る者とそうでない者との実践の比較

では、ここでボタンつけとまつり縫いの実践が出来るか否かと、それらの技術を活かして補修が必要な時に誰がするのかとの関連性を求めることにした。まず、ボタンつけについては「じょうずに出来る」と「まあまあじょうずに出来る」というように程度の差はあるが、両者を合わせて「出来る」ものと、「あまりじょうずに出来ない」と「全然出来ない」を合わせた「出来ない」という2つのボタンつけについての結果を表8に、同様にまつり縫いについては表9に示した。

まず、ボタンつけをみると、男子で「出来る」という者でも「家族など自分以外にしてもらおう」者が約60%と最も多いものの、「自分でつける」という者が40%であ

った。これに対して、「出来ない」者ではこれも「家族など自分以外にってもらおう」が80%を超えて最も多く、「自分でつける」というのは2.4%に過ぎなかった。そのため、「出来る」者と「出来ない」者とでは、ボタンつけの補修を誰がするかについて $\chi^2$ 検定によって1%水準の有意差があり( $\chi^2(2)=17.6, p<.01$ )、ボタンつけが「出来る」という者の方が自分でつけるという者が多かった。これに対して、女子ではボタンつけが「出来る」という者の方が「出来ない」という者と比較して、「自分でつける」という者の方が多いという傾向はあったが、両者の間に $\chi^2$ 検定により有意な差は認められなかった( $\chi^2(2)=3.6, ns$ )

女子の場合は、ボタンつけが出来なくても自分でつけようとする者が多いことを示すものであった。

表8 ボタンつけの実践とボタンつけが出来るか否かとの関連

人 (%)

	男子		女子		計
	出来る	出来ない	出来る	出来ない	
自分でつける	14 (40.0)	1 (2.4)	45 (59.2)	8 (36.4)	68 (39.1)
家族など自分以外にしてもらおう	20 (57.1)	35 (85.4)	31 (40.8)	14 (63.6)	100 (57.5)
そのままにしておく	1 (2.9)	5 (12.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (3.4)
計	35 (100.0)	41 (100.0)	76 (100.0)	22 (100.0)	174 (100.0)

次に、まつり縫いについてはどうであろうか。

男女ともまつり縫いが「出来る」という者の方が「出来ない」という者に比べて「自分で直す」という者の割合は多いが、 $\chi^2$ 検定により有意な差が認められるものではなかった(男子： $\chi^2(2)=4.6, ns$ 、女子： $\chi^2(2)=2.7, ns$ )。したがって、まつり縫いが出来るか否かにかかわらず、まつり縫いを使用しての補修は自分以外の家族などに依存する傾向にあると言える。

ボタンつけに比べると、男女とも「出来る」という者が少ないということが影響しているものと考えられる。多種多様な被服が、容易にしかも安価に入手できるというファストファッションの時代を反映してか、高校生はボタンつけやまつり縫いによる補修に重きを置いていないのではないかと思われるが、その理由についてはさらに検討する必要がある。

表9 まつり縫いの実践とまつり縫いが出来るか否かとの関連

人 (%)

	男子		女子		計
	出来る	出来ない	出来る	出来ない	
自分で直す	4 (23.5)	4 (6.9)	14 (28.0)	8 (16.7)	30 (17.3)
家族など自分以外にしてもらおう	12 (70.6)	44 (75.9)	31 (62.0)	31 (64.6)	118 (68.2)
そのままにしておく	1 (5.9)	10 (17.2)	5 (10.0)	9 (18.7)	25 (14.5)
計	17 (100.0)	58 (100.0)	50 (100.0)	48 (100.0)	173 (100.0)

4. 衣生活観と衣生活行動

本調査対象の高校生は衣生活についてどのような考えを持ち、衣生活行動を行っているのかを示す被服の着方や手入れ、環境への配慮や経済面への配慮などの8項目について明らかにした。

表10から分かるように、男子は「清潔な被服を着るように心がけている」が67.1%で最も多く、次いで「身だしなみに気をつけたり、自分にあう被服を工夫したりしている」が60.5%、「被服の購入には、持っている被服の種類や色を考えて計画的にしている」が34.2%であった。

これら上位3項目は、清潔、見だしなみ、被服の購入計画であり、衣生活の自立を考える高校生として望ましい考え方をもち、行動していることが理解できた。その他、「高校生なのであまり費用を被服に使わないようにしている」は26.3%であった。これら以外の項目については、いずれも20%以下の割合を占めるに過ぎず、重視しているとは言い難い状況であった。

女子で最も多くの割合を占めたのは、「身だしなみに気を付けたたり、自分にあう被服を工夫したりしている」で80.6%にも達した。「清潔な被服を着るように心が

けている」は65.3%、「被服の購入は、持っている被服の種類や色を考えて計画的にしている」が60.2%であった。これら3項目は男子においても重視されていたが、いずれも男子よりも割合が多く、より一層重視しているものと考えられる。次に多いのは、「家族の衣生活に協力し、購入や洗たくなどを手伝っている」、「不用になった被服は、環境を考えて処分している」と「高校生なのであまり無駄な費用を被服に使わないようにしている」の3項目が20%代で、家族のために環境に配慮して、また経済的なことも考慮して衣生活行動を行っていることが理解できた。

衣生活について「家族にまかせている」という者は、男子15.8%、女子3.1%であり、生活者としての自覚がない者が一定の割合で存在しており、衣生活における自立の重要性を理解させる必要がある。

これらの結果から理解できるように、無答を除いて $\chi^2$ 検定を行ったところ5%水準で有意差があり、男女間の衣生活観や衣生活行動に差異が認められた( $\chi^2(8) = 15.9, p < 0.5$ )。ただ、着方や被服の購入については、男女とも自分なりの考えを持ち、行動しようとする傾向があった。そこで、さらにこれらの内容を学習することによって、衣生活管理能力を高めることになるとと思われる。

表10 衣生活観と衣生活行動

	男子	女子	計
清潔な被服を着るように心がけている	51 ( 67.1)	64 ( 65.3)	115 ( 66.1)
身だしなみに気をつけたり、自分にあう被服を工夫したりしている	46 ( 60.5)	79 ( 80.6)	125 ( 71.8)
被服の購入は、持っている被服の種類や色を考えて計画的にしている	26 ( 34.2)	59 ( 60.2)	85 ( 48.9)
家族の衣生活に協力し、購入や洗たくなどを手伝っている	16 ( 21.1)	25 ( 25.5)	41 ( 23.6)
不用になった被服は、環境を考えて処分している	15 ( 19.7)	22 ( 22.4)	37 ( 21.3)
不良品などトラブルがあった時は、きちんと対処している	12 ( 15.8)	15 ( 15.3)	27 ( 15.5)
高校生なのであまり無駄な費用を被服に使わないようにしている	20 ( 26.3)	21 ( 21.4)	41 ( 23.6)
家族にまかせている	12 ( 15.8)	3 ( 3.1)	15 ( 8.6)
その他	2 ( 2.6)	3 ( 3.1)	5 ( 2.9)
無答	2 ( 2.6)	0 ( 0.0)	2 ( 1.1)

(複数回答)

### 5. 家庭での被服製作の実態

高校生の場合、家庭で被服製作はどの程度行われているのであろうか。その実態について、「よく製作する」～「全く製作しない」までの4件法によって回答を求め、明らかにしたのが表11である。

男子は71.1%の者が、女子では50.0%と半数の者が「全く製作しない」であった。これにあまり「製作しない」という者を合わせると、男子は89.9%の者が、女子では87.8%と程度の差はあるものの、製作しないという者であった。逆に、「よく製作する」と「時々製作する」とを合わせて製作するという者は、男子7.9%、女子10.3%と少数であった。男女間に違いがあるか否かをみるため、 $\chi^2$ 検定を行ったところ5%水準で有意差が認められ( $\chi^2(3) = 11.1, p < 0.5$ )、女子の方が製作する者が多いという傾向にあった。

これら製作するという者の具体的な製作物を表12からみると、ティッシュ入れなどの布を使用した小物類が大部分で、Tシャツを製作した者はわずか1人であった。男子では在籍する高校が神楽の盛んな地域にあって神楽団の一員として活躍しており、衣装の補修をしたり、製作の手伝いをしたりするという者が2人あった。被服の製作技術をうまく活用出来ている事例だと言える。

このように被服製作については、布を用いて小物類を製作するという趣味の範囲での活用が主であったが、製作をすることによって、技術の定着を可能にし、製作物による達成感や満足感が得られるので<sup>8)</sup>、高校段階においても製作に取り組めるような教材と実際の生活に活かせるような取り組みの工夫が求められる。

表11 被服製作の実態

	男子	女子	計
よく製作する	2 ( 2.6)	1 ( 1.0)	3 ( 1.7)
時々製作する	4 ( 5.3)	11 ( 11.2)	15 ( 8.6)
あまり製作しない	14 ( 18.4)	37 ( 37.8)	51 ( 29.3)
全く製作しない	54 ( 71.1)	49 ( 50.0)	103 ( 59.3)
無答	2 ( 2.6)	0 ( 0.0)	2 ( 1.1)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

表12 製作物

・ティッシュ入れ 2人	・小物入れ	・布キーホルダー	・ぞうきん
・ぬいぐるい	・きんちやく袋 2人	・マスコット	・Tシャツ
・弁当袋	・エプロン	・ランチョンマット	・ポーチ
・かばん	・イヤリング	・リメイク品	・神楽の衣裳 2人

6. 衣生活についての家庭教育

高校生が、家族から衣生活についてどのような教育を受けているのかについて、着方、手入れの仕方、選び方や経済性などに関する8項目とその他によって明らかにした。

表13から、男子は「高校生らしい被服を着なさい」と「自分らしい被服を着なさい」がともに18.4%で多い方であった。次いで、「清潔な被服を着なさい」が9.2%であり、着方に重点をおいて教育がなされていた。

女子については、「自分らしい被服を着なさい」と「ボタンつけやほころび直しなどは、自分でやりなさい」がともに16.3%であった。その他、「高校生らしい被服を着なさい」が12.2%、「清潔な被服を着なさい」が男子と同

様に9.2%であった。このように、女子においても清潔、高校生らしさ、自分らしさをキーワードにした着方について教育を受けており、男子に対する教育とほぼ同様であった。ただ、女子に対してはさらにボタンつけやほころび直しなどを自分でやるようにと教育しており、男子と異なる点であった。このような差異が、「3. 被服の補修の実施者及び補修のための技術の習得」の項で述べた、男女間の違いをもたらす一因であると思われる。

さらに、男女ともに「特に言われぬ」というのが約40%を占めており、高校生にもなると衣生活について家族からの教育は、極めて低下してきていると言える。

このような実態からみて、学校教育での学習が大きな意味を持つてくると考えられる。

表13 衣生活の家庭教育

人(%)

	男子	女子	計
清潔な被服を着なさい	7 ( 9.2)	9 ( 9.2)	16 ( 9.2)
高校生らしい被服を着なさい	14 (18.4)	12 (12.2)	26 (14.9)
自分らしい被服を着なさい	14 (18.4)	16 (16.3)	30 (17.2)
自分の被服を選んだり、購入したりする際には、取り扱い絵表示などを見てから決めなさい	3 ( 3.9)	4 ( 4.1)	7 ( 4.0)
自分の被服は自分で洗たくしたり、手入れをしたりなど、自分で管理をしなさい	7 ( 9.2)	9 ( 9.2)	16 ( 9.2)
ボタンつけやほころび直しなどは、自分でやりなさい	3 ( 3.9)	16 (16.3)	19 (10.9)
被服はブランド品などよりも、実用的なものを選びなさい。	5 ( 6.6)	6 ( 6.1)	11 ( 6.3)
高校生なので、被服にはあまりお金をかけないようにしなさい	5 ( 6.6)	6 ( 6.1)	11 ( 6.3)
その他	1 ( 1.3)	4 ( 4.1)	5 ( 2.9)
特に言われぬ	31 (40.8)	37 (37.8)	68 (39.1)

(複数回答)

7. 衣生活の学習意欲

すでに述べたように、本調査対象者は衣生活の関心がかなり高かったが、このことが学習意欲に影響しているであろうか。衣生活の学習意欲について、「もっと学習したい」～「全く学習したくない」までの4件法によって明らかにした。

表14から見ると、男子は「やや学習したい」という者が47.4%と最も多かった。これに「もっと学習したい」とする者を合わせると54.0%となり、半数以上の者に学習意欲があった。「あまり学習したくない」というのは約1/3で、「全く学習したくない」という者があったが、その割合は約10%であった。

女子では「やや学習したい」というのが57.1%で最も多かった。次に多いのが「もっと学習したい」24.5%とする者で、両者を合わせると81.6%になった。そのため、「あまり学習したくない」と「全く学習したくない」というものを合わせても20%に満たず、衣生活についての学習意欲は、男子に比較して女子がかなり高いといえる。男女間の違いをみるため、無答を除いて $\chi^2$ 検定を行ったところ1%水準で有意差があり ( $\chi^2(3) = 17.6, p < .01$ )、差異が認められた。

これらには男らしさ、女らしさという性差に起因する要因などの影響が考えられるが、被服を着用することは自己表現のため、清潔にまた快適に生活を営むには必要

なことである。したがって、学習意欲には男女差があることを前提にして、興味・関心を持って学習できるように工夫することが重要である。

衣生活の関心と学習意欲との関連を求めため、両者の相関係数を求めたところ、 $r=0.68$ となった。したがって、当然のことと思われるが、衣生活に関心のある者は学習意欲も高い傾向にあることが認められた。したがって、高校生では衣生活を営むことは他人事ではなく、また被服は自己表現であることをより強く認識できるような教材研究が必要となる。

表14 衣生活の学習意欲

人 (%)

	男子	女子	計
もっと学習したい	5 ( 6.6)	24 ( 24.5)	29 ( 16.7)
やや学習したい	36 ( 47.4)	56 ( 57.1)	92 ( 52.9)
あまり学習したくない	25 ( 32.9)	5 ( 15.3)	40 ( 23.0)
全く学習したくない	7 ( 9.2)	3 ( 3.1)	10 ( 5.7)
無答	3 ( 3.9)	0 ( 0.0)	3 ( 1.7)
計	76 (100.0)	98 (100.0)	174 (100.0)

#### IV まとめ

生涯に渡って豊かで充実した衣生活を営むことは、人間として基本的な欲求を満たすことになる。この実現には被服に関する基礎的・基本的な知識や技術を確実に身につけ、実際の生活に活かすことが出来るように衣生活管理能力の形成が重要である。本研究は、このような観点に立って、高校生が衣生活管理能力を身につけて自立した衣生活を営むことができるように、衣生活の関心やどのような衣生活観を持ち、衣生活行動を行っているのか、また家族からの指導の実態などを調査することによって、家庭科における衣生活管理能力を形成するための課題を明らかにすることを目的として取り組んだ。その結果、次のようなことが明らかとなった。

まず、衣生活の関心については男女差があるものの、全体として衣生活に関心を持つ者は半数以上であり、衣生活管理能力の形成を目指すには好都合な状況にあると言える。また、衣生活の学習意欲も同様の傾向にあるので、両者の関連を相関係数によって求めたところ、男女とも衣生活に関心のあるものは、学習意欲も高い傾向にあった。このことは、衣生活の関心の高さや学習活動とをどううまく結びつけるかが課題であることを示すものである。被服を着用する際の考慮点をみると、休日用の場合に、男子は生活活動への適合をより重視し、女子では生活活動への適合と自己表現を同じように考慮しており、男女間で用途に応じて着用する被服の考慮点は若干異なることが明らかとなった。したがって、このような差異を考慮して、着方の指導を検討する必要がある。

被服の補修技術であるボタンつけは男子では出来る者より出来ない者の方が多く、ボタンがとれた時に、自分でつける者が20%未満であったように、他人任せやそのままに

しておく者が大部分で、実践が伴っていないことによるものと考えられる。ただ、ボタンつけが出来るものとそうでない者に分けて、ボタンつけを誰がするのかについて見たところ、やはり出来るという者は自分でつけており、出来ないという者との差異が明確であった。女子では、ボタンつけが出来ると自己評価する者が多く、それゆえボタンが取れた時には、自分でつけるという者の割合が多くなったものと考えられる。まつり縫いは男女とも出来ない者が多いものの、女子は出来なくても自分でしようという者が多くみられた。衣生活観と衣生活行動は、着方や被服の購入については、男女とも自分なりの考えを持ち、行動しようとする傾向があった。さらにこれらの内容の学習を重ねることによって、衣生活管理能力を高めることになると思われる。被服製作は、布を用いて小物類を製作するという趣味の範囲での活用が主であった。製作をすることによって、技術の定着を可能にし、製作物による達成感や満足感が得られるので、高校段階においても製作とその製作品を実際の生活に活かせるような取り組みの工夫が求められる。

衣生活について家庭教育の内容は、男子は着方、女子は着方とともにボタンつけやまつり縫いなどの補修についてが主であった。しかし、男女ともに「特に言われたい」というのが約40%を占めて、家庭での教育力は、低下してきていると言える。

以上のように、衣生活については家庭教育よりも家庭科での学習が重要になるものと考えられる。そして、男女間において考え方や被服行動に差異がみられたのでその違いを踏まえ、また衣生活の関心の高さを活かして、意欲的に取り組める内容を工夫して指導することが、衣生活管理能力の形成について課題であると考えられる。

#### 【参考文献】

- 1) 多々納道子(1983) 衣生活管理能力の研究(第1報) —大学生の衣生活の実態と意識—日本家庭科教育学会誌 26(2):75-82
- 2) 文部科学省(2010) 小学校学習指導要領解説 家庭編 東洋館出版
- 3) 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 教育図書
- 4) 文部科学省(2011) 高等学校学習指導要領解説 家庭編 開隆堂
- 5) 多々納道子(1989) 衣生活管理能力の研究(第3報) —大学生の衣生活における性別役割意識と形成要因の実態— 日本家庭科教育学会誌 32(2) 7-13
- 6) 辰巳理恵子(2014) 高等学校家庭科における消費者教育の効果的な学習指導の在り方 平成26年度研究紀要・収録(22) 奈良県立教育研究所長期研修員プロジェクト研究 1-4
- 7) 田中志穂/内田恵美子(2008) 家庭科学習の定着度 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要(17号) 53-59
- 8) 多々納道子・竹吉昭人(2006) 家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義 島根大学教育学部(教育科学) (39) 19-24